

宮城学院女子大学

災害復興ボランティア 活動報告

シンポジウム「東日本大震災と学生ボランティアの役割」

2011年12月17日@東北学院大学

宮城学院女子大学の多くの学生／教職員は、「自分たちも被災者だが、自分たちよりもっと大変な思いをしている人々がたくさんいる」という思いから、災害復興ボランティアに取り組んできました。大学で行われたボランティア講習会には何百人もの学生が参加し、津波被災地でのがれきの片付けや市内での支援物資の仕分けなど、さまざまなボランティア活動を行いました。

私たちは、被災地に近い宮城学院女子大学の学生として、「自分たちならでは」の被災者支援の形を考えたとき、①子どもやお年寄りなどの社会的弱者への、②長期的／継続的な、③日常生活における細々した問題に着目した、支援をしていきたいという思いを抱きました。津波被災地でのがれき撤去に代表される、報道などで必要性がよく知られた短期集中的な活動については、地域の外からたくさんのボランティアがやってきていたからです(もちろん、絶対的な人手不足があることは、承知していますが)。

被災者支援はとても大切ですが、その活動を学業との両立しながら続けていくのは、簡単ではありません。被災地に近いところにいる私たちだからこそ、支援活動を「一時のがんばり」で終わらせないことが、重要だと思いました。

東京や大阪からのボランティアには難しい継続的な支援。自分たちの生活を犠牲にすることなく長期間続けられる活動。教員／保育士／管理栄養士などの養成課程を持つ大学で学んだ自分たちの知識や経験を生かせる活動。外部からやって来た人たちには見過ごされてしまいそうな、様々な小さな困難に目を向けた支援。そのような考えから、子どもや「食」の支援を行ういくつものプロジェクトが、教員の協力も得て立ち上がりました。学生がひとりではがんばるのではなく、多くの仲間との協力のもとに、役割分担をしてローテーションを組み、ことさらに無理をすることなく、今も続いています。本日の発表では、そのうちの三つを取り上げて、活動内容を報告します。

「食のほっとタイム」プロジェクト

食品栄養学科4年 高科祐希／高橋あゆみ

<プロジェクトの目的と概要>

被災された方々に「食」を通して“ほっとしたひととき”をもっていただくこと。

4月中旬より石巻市立病院スタッフへの昼食支援、YWCA 宿泊のボランティアの夕食作り、保育所の給食・おやつ、小学校の校外学習お弁当支援などを行い、現在も継続中です。

本日は私たちが最も心に残っている「石巻市立病院スタッフへの昼食支援」について報告します。この活動は、まだ震災の被害が色濃く残る4月中旬から6月まで行ったもので、市役所にある病院の仮事務所へ温かい食事50食を週一回運んでいました。

<ボランティアの支援内容>

石巻市立病院は海を目の前にした場所に建っていたため、津波の被害を大きく受けました。入院患者

さんは市内の他の病院に移され、事務所は津波被害を免れた石巻市役所の4階に間借りしていました。病院スタッフの中には自宅が被災し、避難所から通っている方や、何日も家に帰らず病院に泊り込んで仕事をしている方もいました。支援物資として送られた食料は患者さんへ優先的に分けるため、震災直後はわずかなお菓子で数日過ごさなければならない状況にあったそうです。私たちがうかがったときもスタッフ休憩室の机の上には菓子パンやお菓子が積まれていて、満足な食事ができていない様子がうかがえました。そのためか初めて食事を届けたとき、ただ「温かい」ということだけで喜んでいただきました。それから食事はできるだけ温かい状態で届けられるようにしました。その他にもスタッフの方のリクエストを反映したメニューを取り入れる、手書きのメッセージを添える、などの工夫をしました。印象に残っているのは「スパゲッティが食べたい」というリクエストでした。そのときは青じそと粉チーズを合えたスパゲッティにしました。麺は茹でるとのびてしまうのでかなり硬めに茹でて、青じそは温かくすると変色してしまうので市役所に着いてから和えるようにしました。

<活動における困難と課題>

この活動の中で私たちは当初、食事を持っていった時、被災されたスタッフの方々を目の前に、笑顔を見せて良いのかという戸惑いがありました。しかし暗い顔をしては被災地で復興に励む皆さんの気持ちまで暗くさせてしまうのではないかと、とても悩みました。また、被害の小さかった私たちがボランティアとして食事を提供することが、被害の大きい被災地の方にとって負担になったり、気を遣わせたりしないか等の葛藤がありました。

しかし、食べて下さった方々が連絡用ノートに書いてくださったメッセージを読んで、私たちの食事を楽しみにしてもらえているんだ、元気を与えられているんだ、心身ともにぎりぎりまで頑張っている皆さんのためにもっと頑張りたい、という気持ちが湧き上がってきたと同時に、「これでいいんだ」と、私たちの方が励まされました。

- 甚大すぎる被害を受けた地域へいき心が折れグタグタに疲れて帰ってきたときに心のこもった料理を食べ元気ができました(看護師 M さん)
- 一日の疲れも何もかもスーッとひいていき、しばし気持ちが安らぎました(看護師 I さん)
- 久しぶりにまともな昼食を、それもおいしいメニューを頂きました(S さん)
- 職場でパンとおにぎりの日々だったので、ミートソース&ポテトサラダはとてもおいしかったです。(看護師 S さん)

回を重ねるにつれスタッフの方との仲が深まり、顔を合わせることや喜ぶ顔を見ることが楽しみとなっていきました。しかし突然、病院スタッフへのボランティアが終了した、という連絡を受けました。市役所内の仮事務所がなくなり、これまでのように食事支援を受けられなくなったから、という理由でした。スタッフの方に喜んでいただけて、私たちもやりがいを感じていたし、何より病院やスタッフの方々の厳しい状況は変わっていないのにボランティアができなくなってしまったということがとても辛かったです。

<活動を通して>

私たちは管理栄養士を目指してこれまで大学で学んできました。その中で“食は生活の質に関わる”ということは何度となく聞いてわかったつもりでいました。しかし災害により普通の食事が普通ではなくなったこのときほど、この言葉の重みを感じたことはありませんでした。また、食べていただいた方からの「ほっとする味に心も温まりました」というメッセージを読んだとき、身体が満足してこそ心が満足するのだろうと感じました。

「南光台小学校子ども支援」プロジェクト

児童教育学科4年 柳内亜希子／藤野亜衣

<プロジェクトの目的と概要>

南光台小学校は、東日本大震災により校舎に亀裂が入り、校庭は地割れし、1週間後の応急危険度診断では「危険」の判断を受けました。そのため、新学期からは、小学校に隣接しているコミュニティ・センター及び児童館と近くの中学校2カ所を借り、学年ごとに分散して学校生活を送ることを余儀なくされました。その中でも、私たちは2年生のクラスへボランティアとして入ることになりました。2年生は、4クラスを1・2組と3・4組に分け、2クラス合同で授業を行っていました。

<ボランティアの支援内容>

授業を行う場所もコミュニティ・センターの和室と児童館のホールという2クラス合同で行うには窮屈な所でした。1週間毎に場所を交換するものの、慣れない環境の中で、子どもたちは目に見えないストレスを感じているようでした。

子どもたちを取り巻く環境

- 窮屈な中での学習(新しいルールなど)→集中力の散漫を招く
- 簡易給食(主食と牛乳のみ)
- 週に一度の引っ越し

ボランティアの支援内容(大きな作業よりも、むしろ「ほんのちょっとした」ことが重要)

- 遊び相手
- 授業に集中できない子への働きかけや、学習の理解ができていない子への支援
- 給食の用意の手伝いや掃除などの「雑用」

<活動における困難と課題>

同じ被災地の被災者としてボランティアを継続していく中で、私たちは様々な壁や課題にぶつかりましたが、互いに意見を持ち寄り、少しでも子どもたちが快適に毎日を過ごすにはどうしたらよいか考えました。今回はその葛藤や課題について発表していきたいと思います。

活動における課題

- どこまで子どもの中に入っていいのか(甘えてくる子への対応、学年ごとの違いなど)
- 先生の指導の仕方に合わせて、子どもとの関わり方を配慮する必要
- 大学で学んできた学校教育と、現場における実践とのギャップ
- 活動当初とは支援のニーズが変わっていく中での対応

<活動を通して>

ただお手伝いをすればいい、ただボランティアをすればいいのではなく、日々変わっていく被災者の方々のニーズに応えながら支援をすることはとても大変なことでした。その中で私たち自身も日々様々な葛藤や課題にぶつかり苦悩していました。しかし、「とても助かるわ」や「もっと遊ぼうよ!」と先生や子どもたちが何気なく言う一言がとても嬉しく、小さいことでも何か役に立っているのだと実感することができました。同じ被災者だからこそ心に寄り添い、様々な感情を共有しながら行った長期的なボランティアは、私たちを一回りもふた回りも成長させてくれました。今後も継続して充実したボランティアをしていきたいと思っています。

「七郷小学校子ども支援」プロジェクト

食品栄養学科4年 本内さくら／伊東千春

<プロジェクトの目的と概要>

3月11日の大震災によって、学校の近くまで津波が押し寄せた七郷小学校は、2000人もの人たちに避難所として利用されていました。現在、教室での授業は行われていますが、校庭には震災時の炊き出しや暖を取るために用いられていた道具が残っていました。また、校庭にあったプレハブの校舎も使えなくなるなど、活動が限られる場面も多くなりました。

七郷小学校は、特別支援学級も含んで1000人近い大規模校なので、子どもたちの学習環境や被災状況も多様で、ひとくくりにはできません。私たちは、震災の影響がまだ残っているなかで、先生方や子どもたちの力になりたいと思い、ボランティア活動を行っています。

<ボランティアの支援内容>

地震の影響により、体育館が使えなくなってしまったため体育の授業はホールを使用していました。また校庭には、避難所となった際に暖を取るために使用したドラム缶や木材、工事のための重機がたくさんあり、子どもたちの活動の範囲は制限されていました。プレハブ校舎も使用不可となり、ホールを使用していたため、なれない場所での授業に、子どもたちは戸惑いストレスを感じていました。

七郷小学校でのボランティア活動は2011年5月9日に開始し、4年生6人のメンバーが月～金曜日、毎日2人ずつ交代制で活動しています。

ボランティアの活動内容は、授業中の学習支援、特別支援学級のお手伝いをしています。授業中の支援だけでなく、教室の掲示物の作成や給食の下膳指導、登下校の指導なども行っていました。また、職員室の窓掃除なども行い、児童はもちろん、教職員も安心・快適に過ごすことができる環境をつくり、一緒に楽しく勉強をするお手伝いをしています。

<活動における困難と課題>

実際に被災時の様子を語る児童や絵で表現する児童もいました。被災時のつらさや被害の大きさが自分たち自身も分かるからこそ、どのように声をかけてよいかとても戸惑いました。活動中は、どの程度子どもとの間に入っていったらいいのか、また先生によってクラスのルールが異なるため、それに合わせて支援を行うことが困難でした。事前にクラスに入る前に担任の先生と打ち合わせを行い、何の授業でどのような支援を行ったらよいか確認を行うようにし、スムーズな連携が図れるよう努めました。

<活動を通して>

子どもたちの日々の様子を観察し、一緒に生活することで普段の生活では感じることでできない様々なことを感じ、充実した時間を過ごすことができました。私たちがボランティアに行き始めた当初は、子どもたちからも地震の話題を耳にしたりしましたが、現在では子どもたちに笑顔が戻り、復興していることを実感することができました。また、校長先生や教頭先生から、とても助かっているというお褒めの言葉をいただきました。でも何より嬉しかったのは、子どもたちの反応です。落ち着いて座っていることが難しい子などに、1日つきっきりでケアをすることもありました。それは、自分たちがボランティアとして入ったからこそできたことです。時間をかけて打ち解けて、例えば保健室に入り浸りだった子が授業に出席できるようになって「先生、次はいつ来るの?」と聞かれたときは、本当に嬉しかったです。同じ被災地に住む者だからこそ、震災による悲しみや不安を共有しながら、子どもたちに寄り添い、何か少しでも役に立てたらと思い始めたボランティアでしたが、子どもたちから得るものは多く、私たち自身も勇気づけられました。